

ハインリッヒ・フォン・クライストの『聖ドミンゴ島での婚約』

小 粥 良

序

アジアではサイゴン陥落、アフリカでは最後のヨーロッパ植民地の消滅といった歴史的な事件が起きた 1975 年という象徴的な年に、ケープタウン大学のペーター・ホルンが『Monatshefte』第 67 号に発表した「クライストは人種偏見をもっていたか?——『聖ドミンゴ島での婚約』 関連文献に対する批判的分析」という題名の論文¹は、人種・ジェンダーの視点からこの作品を読み解くアプローチに扉を開いたのであるが、それは特に、ルース・アングレス²、ハンス・ヤーコプ・ヴェルレン³、ズザンネ・ツァントップ⁴ といった（ドイツ語圏出身者を含む）アメリカのドイツ文学研究者たちの間に反響を見出した。しかし、クライストをあたかも人種・ジェンダーにまつわる偏見に抗して戦う解放の闘士として祭り上げようとするかのような傾向に対して、ハンス・ペーター・ヘルマンは、穏やかにではあるが、批判的な修正意見を提出しているように思われる。⁵

文化を構築されたものと捉えるような今日の文化理論の立場からすれば、人種偏見について闘争的に論じること自体が、人種を本質的なものとして固定し絶対化するような単純な二分法的姿勢、いわゆる本質主義に陥りかねないものに見える。しかし、差別や偏見というもの現実には存続している限り、過渡的戦略としてアイデンティティ・ポリティクスが要請されることもまた認識されているところである。⁶ ホルンの論に見られるような 70 年代の左翼的視点——その問いの立て方そのものに表れている——が、今日の目から見れば、被抑圧者の解放を目指す歴史の進化を暗黙に前提とする、一種の楽天主義に支えられているように映る。クライストが人種偏見をもっていたかどうかを問題の中心に据えるならば、この作品の複雑な味わいが詳細に取られない。クライストは人種差別の理不尽さとか、奴隷制度の廃絶の必要を訴えるために、この作品を書いたわけではない。ヘルベルト・ユルリングスもこの点を指摘して、この短編の中心にあるものが恋愛物語であることに注意を促している。

確かに、「ハイチ革命」というテーマは、この物語の特徴的な冒頭部にとって、また、歴史的背景として、重要ではあるが、しかし、それはさっさとグスタフとトーニの恋愛物語によって脇へと押しやられてしまう。中心的なテーマは、致命的な結果を伴った「婚約」であり、その際、まずもって吟味されなければならぬのは、この愛の言説がいかにして政治的な言説と結合しているかである。⁷

かといって、ホルンの論文が人種の問題に注意を喚起したこと自体の功績が薄れるわけではない。その問題が従来、解釈において、無視されるか、周辺的な問題に過ぎない

ものとして軽く扱われていた有り様を、ホルンは辟易しながら振り返っている。⁸ 70年代半ばを境に解釈の傾向が大きく変化したことは、どの研究者も認めているところであるが、ホルンが並べ挙げている例を見ていくと、意識されぬ大前提としての白人優越主義、ヨーロッパ中心主義は覆うべくもなく、この作品においてクライストが批判している対象がまさしくそのような無意識の大前提そのものであると思われるゆえに、この問題の容易ならぬ根深さを感じずにはいられない。要するに、コミュニケーション（の行き違い）の問題も、人種偏見の問題も、二つの別の問題として分けることはできず、一つの問題の二つの面として見ることができる。どちらかに重点があるというよりも、重点は、そのように主観性に囚われた人間が客観的な判断なぞ下せるはずがないという、人間存在についての悲観的な見方にこそ置かれているのであり、不完全な（いわば原罪を背負った⁹）人間の認識のあり方こそが、作品において問われている最大の問題なのだと思う。そして、そのような人間が運命的に出会い、その限界性のゆえに滅びる悲劇こそ、クライストが最も強い関心をもって描こうとしたものではないだろうか。

1. 啓蒙の矛盾——自文化中心的「理性」

この作品を題材として一学期間授業を行ったが、学生たちが提出した最終レポートを見ると、やはり、結末に対して納得がいかないという気持ちが濃厚に表れている。なぜ、トーニはグスタフに殺されなければならないのか？ロミオとジュリエットのような対立する二集団を背景とした悲劇であることは確かだとしても、¹⁰ トーニの犠牲によって対立の宥和がもたらされるわけでもなく、彼女の死はただむなしく、哀れなもの映る。あまりにも酷く、非業の死ではないか。異人種間の結婚がさほど稀なことでもなくなった現代の若者からすれば、このような死は、理不尽で受け入れがたいものとしか感じられないのである。

もし、ナポレオンによるドイツ征服の渦中にあった作者が、明白に反帝国主義的、反フランス的な意図をもって書いたのだとすれば、なぜ、人種間の相克が乗り越えられるような物語をクライストは提示しなかったのか。「自由・平等・博愛」を掲げ、人権宣言まで発しながら、植民地においては差別を存続する、フランスの明らかな二重基準を告発しているのだとすれば、その結果として引き起こされた黒人反乱の中で展開する、白と黒の対立からはみ出すかのようなスイス人傭兵と混血娘の恋愛とその挫折を描く理由は何か？トーニは自らを「白人」と宣言しはするが（「私は裏切ってなどないわ。私は白人であり、あなたたちが捕らえている若者と婚約しているのだから。」[SWB II 196,5-6]）、ポカホンタスのようにヨーロッパに行ったりはせず、結局のところ、不可能な中間地帯に留まり続け、そこで死ぬこととなる。グスタフを愛することによって生じる感情であるとはいえ、普遍的な人間性の意識に目覚め、主体性をもって極めて行動的に活躍するトーニの姿は、女性が個としての存在を確立していく過程を鮮やかに示し、

欺瞞に満ちたヨーロッパ人の二重基準に対して真の啓蒙的理想像を提供しえたはずであるが、それは不可能なこととして否定されているかのごとくである。潜在的可能性としてそこにあったはずの別の解決、物語の別の出口は、クライストによって描かれることはなかった。

1811年の春に書かれたと考えられているこの作品¹¹は、1811年3月25日から4月5日にかけて『フライミュートィグ』誌に掲載され、同年の8月に出版された短編集第二巻に収められた。同年11月21日に、クライストはベルリン郊外のヴァンゼー湖畔でヘンリエッテ・フォーゲルと心中死している。すなわち、この短編は死の年に書かれたのであるが、主人公が拳銃により相手の胸を撃ち、次いで自らの頭部を撃ち抜くのは、作家本人の死に方とほぼ一致するので、自らの死を予告する意図をもって書かれたものとも考えることもできる。クライストは、敢えて、出口の無い状況で、唯一の出口としての死を描くことを選んだのかもしれない。そのように考えなければ、なぜこの作品の死が、作者の死に方として選ばれたのかが判然としない。死に方の類似性、模倣性についての指摘は多くなされてきたが、その意味にまで踏み込んで解釈した例は稀である。¹² グスタフとトーニの状況が不可能な中間地帯であることが、作者の状況と重ねられているのだと考えると、関係性がそこに現れてくるように思われる。

しかし、この出口の無さは、いったい何なのだろう。それは思い込みと、思い違いに発しているものなのだ。グスタフはトーニの意図を理解できず、裏切られたと誤解しているし、そう思うときに、彼の愛情は反転して憎悪に変じ、彼の中に根深く存在する人種偏見が呼び覚まされ、トーニは彼の語る挿話に登場する黄熱病を意図的に感染させる娘のイメージと二重写しになる。(グスタフは彼女を「売春婦 (Hure)」[SWB II 197,18]と罵る。) そのような誤解が無ければ、避けえたはずの、変更可能な運命であったはずである。しかし、物語の端々に表れているグスタフという人間の鈍感さ、無批判に信じ込んでいる白人中心の世界観を考慮すれば、そのような誤解が生じることは必然であり、決して避けうるものではなかったことがわかる。グスタフが代表する、この偏狭な、限界づけられた理性が、彼からトーニに伝授される普遍的「人間性」の正体なのではないか。そこにこそ、問題の核心が横たわっている。

つまり、啓蒙の抱える根本的な問題を、クライストは問うているのだと思われる。啓蒙の理想を掲げるはずのフランス革命は、マリアーネの処刑の挿話 (SWB II 178,1-179,21) に見られるような非理性的で残虐な「人間性」の無秩序な爆発を欧州においても引き起こしていたし、それは植民地サン・ドマング (現在のハイチ) における黒人反乱でもまったく同じことで、これら二つの事象はパラレルなものを見ないうる。無秩序とはいっても、そこに論理の一貫性が存在しないわけではなく、欧州においても、植民地においても、旧支配者に対する積年の怨恨が暴力の爆発の引き金となったことに変わりはない。白人がどれほど取り繕ったところで、「人間性」自体が抱えもつ「野蠻」は覆うべくもなく、それは遙か遠くのカリブ海の島という辺境の話であるだけでなく、欧州の真只中で生じている事態と実はまったく同質なのだ。物語の中に登場する白人た

ちにはそれが見えていないだけの話である。それを同質とは思わせないものが偏見であり、ヨーロッパ中心主義的な階層的世界観であろう。

ヨーロッパは「光」の中心であり、それは白い肌色と結びついたイメージとして言及されている。

父がキューバ島のサンチャゴ出身だった私が、昼になると私の顔の上にはほのかに輝きだす微光をどうすることができるでしょうか？また、ヨーロッパで身籠られ、誕生した私の娘が、彼女の顔から世界のあの部分の真昼の輝きを照り返していることに対して、何をすることができるのでしょうか？ [SWB II 169,28-33]

啓蒙 (Lumières) を表す「光」のイメージをクライストが意図的に用いていることは明らかである。啓蒙の光に対置される野蛮の闇という、啓蒙の言説そのものに由来する隠喩が、白と黒という色の対立に投影されている。さらにまた、メスティーサ¹³であるトーニの肌の色が「黄色味を帯びている」¹⁴と形容されるとき、これは、リンネの『自然の体系』第10版(1758)¹⁵に基づいて、人種を白、黄、黒、赤という4色の肌色で分けたカントの『様々な人種について』(1775)¹⁶、『人種概念の規定』(1785)¹⁷——1775年に医学博士論文として受理され、翌1776年に出版されたヨハン・フリードリッヒ・ブルーメンバッハの『De generis humani varietate nativa (人類の自然的変異について)』¹⁸やアウグスト・ルートヴィッヒ・シュレーツァーの『世界史』(1785)¹⁹を加えてもよいだろう——における人種分類を出発点とするドイツにおける人種の形態学的分類を想起させずにはおかない。これは、最終的にはナチスの人種政策へと流れ込んでいく不幸な歴史の元凶であり、当初から人種の優劣という概念と結びついたものであった。(カントはまた、デービッド・ヒュームから黒人に対する人種偏見を受け継いでいた。²⁰) 白と黒の対立という構図は、それゆえ、当時の一般的なヨーロッパ人のものの見方に照らせば、光と闇、文明と野蛮、優越と劣等の対立の構図に他ならない。人間の理性の普遍性を標榜しながら、理性からより多くの障害物を取り除かれ、より光に照らされ、啓蒙化されたヨーロッパと、闇の中に留まり続ける非ヨーロッパという二分法は、結局のところ、自文化中心主義的な態度にその根拠を置いている。そこに近代の限界、近代の問題性が潜んでいたのであるが、クライストは、まさにそのような近代の出発点——ルネッサンスではなく、むしろ啓蒙期を近代の開始とみなすならばの話であるが——において、その問題性に鋭く批判の矛先を向け、理性と呼ばれるものが結局、精神的態度に枠づけられ、主観性に根拠を置くものであることを暴露している。

II. 啓蒙とロマン派の狭間にあるクライストの立ち所

具体的には、それは物語の細部に表れている。たとえば、よく問題にされる語り手の

発言である。語り手の表明する白人中心的な見解が作家の意見を反映するものかどうかについての議論は、今日では馬鹿げたもののようにも感じられるが、かつて語り手イコール作家とする解釈が大手をふるっていたことを考え合わせれば、²¹ 1990年代になってもそれに対する反論がしばしば見られるのも、やむをえぬ事であったと合点される。ユルリングス（1991）は、

最近のクライスト研究において展開されている『聖ドミンゴ島の婚約』の解釈は、基本的には二つの議論に支えられている。かつての研究は、クライストの立場をただちに語り手の立場と同一視した。それに対して、今日では、『婚約』において語り手が取る保守的で、時には人種差別的なものの見方が物語や作者のパスpekティブと完全に一致するわけではないということに関しては、論評するまでもないこととなっている。語り手の見解は、むしろ、枚挙にいとまのない語られた事実だとか、さりげなく織り込まれた副筋だとか、平行する物語によって疑問に付され、部分的に修正を受ける。²²

と述べている。（しかし、ユルリングスはまた、コンゴ・ホアongoの暴力性について、「しかし、それは、まずもって、語り手による一貫して否定的な評価と結びついている。この評価は、確かに、テキストのパスpekティブの中で、物語られる事実や動機によって破られはするが、消去されはしない。読者にとっては、完全に否定的な評価はそのように相対化されはするが、コンゴ・ホアongoがそれによって正当化されはしない。」²³とも述べており、アイデンティティ・ポリティクス／本質主義を擁護するような政治的意図をテキストに読み込むことに対しては否定的である。）また、ヴェルレン（1992）も、

一見、歴史的解説の客観性をもって語られる導入部の状況設定は、記述の中に個人の道徳的意見を挟み込む、かなり保守的な語り手による説明であることが、まもなく明らかになる。物語のこの直接的な道徳化は、二重の目的に奉仕する。第一に、それは、黒人によって犯された（語り手の見解では）非論理的で非人間的な行動によって特徴づけられる述べられた出来事を、制御し、理解可能なものにしようとする。第二に、それは、善悪という観点から、白と黒を並置する二分法的な秩序体系を確立する。語り手の見解は、したがって、歴史的な白人入植者の態度を映し出しているのだが、彼らは、島の『退化した人種』と彼らが呼ぶものと自分たちの権利を分かち合うくらいなら、むしろ死ぬことを望む。²⁴

と述べている。

語り手の意見、および主人公グスタフが表明する意見が、必ずしも作家の意見を反映するものでないことは、アングレス（1977）、ヴェルレン（1992）、ミュラー-ザルゲ

ト（2002）等が指摘しているように、物語全体の中でそれらが破綻したものとして提示されていることから明らかである。²⁵ それらを図らずも作者の見解の矛盾が露呈したものとして捉えるならば、クライストは時代の制約を免れえなかった単なる愚か者ということになり、この作品は（当時のヨーロッパの白人中心的世界観を露呈している証拠物件という意味で）歴史資料としてしか評価できないものになってしまうだろう。クライストは、語り手やグスタフのヨーロッパ中心的な意見表明を、作品全体の構造の中で意図的に破綻させ、そのようにしてそれを間接的に批判しているのだとしか考えられない。テクストに描きこまれていることからしか作品の批評はできないのだとしても、言明の外示的な意味だけから作品を読み解くとすれば、それはいかにも表面的で、ナイーブな読み方といわざるをえない。全体の構造という脈絡の中に置いてこそ、言明の真の価値と効果が合点されることは、自明のことである。作者は、語り手をも主人公をも突き放し、彼らを冷静かつ客観的に取り扱い、全体の構造の中に嵌め込んでいる。

クライストは主観性を客観的に描き出そうとした作家である。作家自身の主観を表現しようとしたと言いたいのではない。言わんとしているのは、彼が、主観的存在である人間の主観的在り様そのものを客観的に観察し、描出しようとしたのだということだ。たとえ、主人公グスタフが、作者自身の死を予示する存在であり、それゆえ、ある程度作者自身が投影された存在であるとしても、作者が心情的に主人公に寄り添ったり、同一化してしまったりすることはない。自己を仮託したような人物さえも突き放して冷静に観察する、そのようなところがクライストにはある。その点で、彼の作品は一種の症例研究のような趣を帯びるのであり、主観性そのものを表現しようとするロマン派とは袂を分かつのだと思われる。

アンケ・ベンホルト・トムゼン（2005）は、クライストが実際に精神病の症例分析に関心を寄せていたという仮説に基づいて、クライストがロマン派と啓蒙の狭間に位置しながらも、基本的には啓蒙の側に立っていることを論証しようとした。²⁶ 飽くまで蓋然性に基づく論ではあるが、クライストが1803年12月末と1804年の6月半ばもしくは5月初旬に、マインツで医師ゲオルク・ヴェーデキントの治療を受けたこと、しかもそれが「心の病（Gemüthskrankheit）」²⁷であったことから、クライストがヴェーデキントを通じて初期精神医学の草分けの雑誌『経験心理学のための雑誌』（1783—1793）を知っていたのではないかと推論し、この雑誌の記事とクライストの作品との平行関係を吟味している。この推論が間接証拠に基づくものに過ぎず、証明不可能であることはベンホルト・トムゼン自身も認めているが、興味深いのは、当時の精神医学上の関心とクライスト作品に表れる諸側面との一致である。ベンホルト・トムゼンは、クライストが医師ヴェーデキントの治療を受けた際に、『経験心理学のための雑誌』を紹介されたという仮説を立て、その雑誌に現れた記事とクライストの作品の間に見られる共通性を論じている。ベンホルト・トムゼンは、『O 侯爵夫人』でのロシア人伯爵の行動について吟味した上で、次のように指摘している。

社会的通念を前にして恥じて隠さねばならないものとしての伯爵の逸脱した行動は、彼の隠喩的な談話の中に間接的とはいえ、やはり言い表されてはいるのであるが、それは 1803/4 年以降の彼の散文と彼の戯曲にとって徴候的なものなので、私にはクライストの題材の選択と再構築の文学的方法のどちらにとっても、例として役立つことができるように思われる。しかしながら、どちらも、ドイツ、特にベルリンでの、後期啓蒙主義のある特定の潮流、『グノーティ・サウトーン』、つまりカール・フィリップ・モーリッツによって編集された『経験心理学のための雑誌』(1783-1793) が提出していた心理学上の課題と一致する。この雑誌の認識対象は、フロイトらによる再版に付せられた後書きで、人間の「心の中の異郷」と呼ばれた。特にモーリッツの説明がそれを目指しているからである。啓蒙された社会の中に存在する異質なものに対するステレオタイプが問題となっている。「人間の中で思考し、夢見ているもの」の人間の中での認識と認知が。そのように彼は一度、それも、品位と道徳に抵触しうるような仕方ですべている。モーリッツは精神病について語っている。関連する経験と観察の文書化によって、彼は精神活動の解明的な分析を活気づけようとし、それによって治療を促進しようとしている。したがって、ライプニッツ・ヴォルフ学派の刻印を帯びた合理的な心理学ではなく、経験的な心理学が問題となっており、それは、後の他の二人の共同編集者、カール・フリードリヒ・ポッケルとザーロモン・マイモンによってもまた（より理論的に方向づけられていたにせよ）代表されていた。²⁸

ロマン派に対置するとき、クライストはより多く啓蒙の側に立っているように見える。しかし、先に見たように、『聖ドミンゴ島での婚約』は本質的に啓蒙批判を含んでもいる。つまり、普遍性を装いながら特殊であり、文明を標榜しながら野蛮であり、客観的な知を主張しながら実際には主観性に囚われているような当時の啓蒙の主流に対しては、クライストは徹底的に批判的であり、対抗的である。クライストが占めるこの複雑な立ち所が、作品の解釈を容易ならざるものになっている。

クライストは客観的であろうとしながら、そのためにこそ主観性を問題にし続け、結局は主観を超越することなどできない人間存在にこだわり続ける。それゆえ彼はロマン派とも啓蒙の主流とも袂を分かつのである。

III. 帯電する二者の遭遇と放電

スイス人傭兵グスタフと混血娘であるトーニという、対立する二集団の中では多少なり異種な、そこからはみ出しかけた位置にいる二人が遭遇するとき、そこに生じる悲劇が物語の軸となっている。その際、性愛が重要な役割を果たす。二人を惹きつけあうものはエロスであるが、このエロスには様々な二人の思惑が絡まりあっている。誘惑者グ

スタッフと誘惑されるトーニ、それぞれの前史がそれぞれの動機に深く関わりながら、この性愛のプロセスは進行している。

グスタフの孤独な状況、方向感覚を喪失した状況については、ハンス・ペーター・ヘルマン (1998) が、それを示すテキストの箇所を詳細に指摘している。²⁹ 身体的な近さ、家族的親密さを求めるグスタフの心理を、ヘルマンは、グスタフが置かれた不安な状況に起因するものとして説明しているが、幼い頃に両親を失ったクライストの孤独な境涯——姉たちがいたけれども——を反映しているのではないかとも思われる。³⁰ また、グスタフにはかつてマリアーネ・コングレーヴェという許婚がいたことが、トーニに向かってなされる彼の打ち明け話の中で明らかになるが、グスタフがこの物語を語るのは、トーニの顔にマリアーネの面影を認めるからである (SWB II 178,9-10)。面差しの相似をきっかけとして、過去の愛の記憶がよみがえるが、それは苦渋に満ちた後悔の念と結びついている。しかし、それはまた、トーニにマリアーネの役割、すなわち、自己を犠牲にし、身を挺してグスタフを救ってくれる女性を期待する思いとも結びついている。トーニが、グスタフのために自己を犠牲にする一種の殉教者であるマリアーネの姿に重ね合わせられ、その役割を受け入れるようグスタフによって暗示を掛けられるという、ヴェルレンの解釈は非常に面白い。そう考えて読めば、トーニの首に掛けられる金の十字架も、まるで催眠術を掛けられる被験者の目の前で揺れるペンダントのように思えてくる。また、もちろん、グスタフの誘惑は伸るか反るかの賭けであって、トーニが本当に信頼できる助力者であるかどうかを試す意味合いも潜んでいる。この物語が (ヘルマンが指摘するように³¹) 第一義的には恋愛物語なののだとしても、その恋愛には様々な思惑が絡みついているように思われる。³²

よく指摘されるように、この物語の原型として「インクルとヤリコ」³³ の物語を想定するならば、グスタフの動機の不純さを疑わぬわけにはいくまい。ユルリングスが、このモチーフの『聖ドミンゴ島での婚約』への関係を、比較的詳しく考察している。

この恋愛物語、より厳密に言えば、白人男性と有色人種の女性の間の不信、愛、裏切りについての物語は、これまで見落とされてきたが、決してただクライストのみによる発明ではない。それはむしろ、既に 17 世紀に形成され、1800 年頃に既に通俗小説やありきたりのパターンとして利用することのできた手本、すなわち、インクルとヤリコのひな型に従っている。しばしばヴァリエーションを見せる基本パターンは、だいたい、一人の白人男が、カリブ海で、原住民の暴力にさらされるが、一人のインディアンの女性の愛 (彼女はそのためにもしばしば自分の命を危険にさらす) によって、生命の危険から救われる、というようなものである。しかし、恋愛物語は、ただ短い牧歌的なエピソードを形作っているだけであり、物語はたいていの場合、白人男が身の安全を確保するや否や恋人を裏切ることで終わる。このすべてはクライストにも見られ、そして彼の物語がもつ否むことのできない批判的潜在力は、この素材の確固とした構成部分である。ヤリコは「高貴な野蛮人」の伝統に

属しており、「インクルとヤリコ」類型のメンタリティー史的価値は、それによって、一人の女性、特に肌の色の黒味があった女性が、肯定的登場人物としてドイツ文学に提供されることにあったのかもしれない。すべての「高貴な野蛮人」と同様に、ヤリコはその際「ヨーロッパ化」される。³⁴

だが、インクル的性格は、グスタフが性急にトーニを射殺してしまう心理的動機を説明するためには有効かもしれないが、真相を知ったグスタフが自らの額を撃ち抜いて死ぬ理由を、うまく説明することはできない。次のように考えるのが妥当ではないだろうか。マリアーネの姿をトーニに重ね合わせることで、グスタフは彼女を真に愛し始め、マリアーネの形見の金の十字架を授けることで、トーニはすっかりマリアーネの位置を受け継いだのだと。グスタフの愛が真実だからこそ、（あまりに性急なものであるとしても）彼の怒りの説明がつくのではないか。自己を救済してくれると信じた女性が逆に裏切り者であったと誤解することが、グスタフの怒りの爆発の引き金となる。これは、O侯爵夫人の怒りと同質のものではないだろうか。天使と思っていたら悪魔だった、というわけだ。インクルとヤリコの物語が下敷きになっているという説は、異人種婚の物語の系譜にこの短編を置いて考察する文学史的観点からは非常に興味深くはあるのだが、物語の核心を明らかにすることに貢献するかどうかは疑わしい。野蛮とされる異郷から連れてこられた花嫁が捨てられるモチーフは、ギリシャ神話のアリアドネや、メデアの物語以来、西洋文学ではおなじみのものだが、インクルをテセウスやイアソンのような薄情男の系譜に入れることは容易であっても、グスタフの場合には無理がある。だが、インクルとヤリコのモチーフは、もちろん、トーニに裏切られたと誤解するグスタフの心理を説明するためには、充分考慮に値する背景である。その際、特に、ズザンネ・ツェントップが指摘する、当時有色人種に対して抱かれていた「信用できない」というステレオタイプ³⁵は、この短編において重要な役割を果たしていると思われる。これによって、白人の仲間とも、黒人の仲間とも、グスタフの主観の中で簡単にその位置を転換してしまう「黄色」の意味をうまく説明することができる。³⁶

トーニの過去も、彼女がグスタフを愛するプロセスに深く関わっている。グスタフに出会う以前のトーニの感情については何も書かれていないのであるが、状況から推察することは可能である。まず、前述のように彼女は、4分の3白人の血が混じった「黄色味があった顔色 (ins Gelbliche gehende[] Gesichtsfarbe)」(SWB II 165,22-23)の混血娘である。白と黒の抗争の中で、ムラータのバベカンとメスティエーサのトーニという混血の存在が描かれることで、曖昧な中間色を含む複雑なグラデーションが織り成される。バベカンの場合、彼女の立場が黒人側にあることは明白であるが、しかし、彼女が白人に対して抱く憎悪は、彼女が過去に混血であるがゆえに舐めさせられた多大な辛苦に起因するものと思われるのであり、それは彼女の打ち明け話に滲み出ている。白人の血が混じってはいても、結局は人間らしい扱いを受けず、フランス人の愛人ペルトランに妊娠した子の父であることを法廷で否認されたばかりか、主人のヴィルヌーヴが命じた 60

回の鞭打ちのせいで健康を損ない、ずっと肺病を患っている（SWB II 173,22-29）。黒人であるコンゴ・ホアongoにしても、ムラータであるバベカンにしても、その怒りと復讐心は十分に根柢のあるものであり、「復讐への熱狂 (Taumel der Rache)」(SWB II 164,25)で済ましてしまえるようなものではない。しかし、トーニの場合はどうか？彼女が黒人集団の中で、自分がかかなり色の白い存在であることに居心地の悪さを感じていなかったという証拠もない。確かに、グスタフに出会う以前の彼女は、命じられるままに、殺人を幫助し続けたのであるが、その感情については何も記されていないので、彼女が心のうちで実際どのような思いで手を貸していたのかは、まったくわからない。ホルン、ヴェルレン、ミュラー・ザルゲト等の議論には、グスタフに出会い、愛に目覚め、彼が吹聴する「人間性」の理念を受け入れるまでは、あたかもトーニになんらの意志も感情もなかったかのような言い方が見受けられるが、それは彼女が特に命令に抵抗した形跡が見られないからである。まず、ホルンを引用しよう。

トーニがきっぱりとコンゴ・ホアongoの家の偽装と復讐心に逆らうとき、それは既に重大な決意である。しかし、彼女でさえも、すべての白人の集団的な共犯関係という議論に対しては、何も言い返すことができない。（- 中略 -）特徴的なことだが、彼女は、「白人の根絶をかつて決議した州法の復讐」に対して、それが自分の愛する男を脅かすことになって初めて逆らうのであるが、一方、以前の彼女は、一人の若いポルトガル人、二人のオランダ人、三人のフランス人、そして多くの他の白人避難民の殺害に際しては、とにかく反対せず、おそらくは積極的に協力したのである。（- 中略 -）トーニがこの行動の正当性に突然懐疑的になること、彼女が、コンゴ・ホアongoとバベカンの残忍非道を今突然に非難し始めることは、確かにトーニの考え方が真に変化したことを示しているのであり、けっして物語の語り手の解釈的な言明と見誤ってはならない。³⁷

次にヴェルレンから引用する。

テキストがトーニに人間的な感情の存在を認め、母親の人種と共同体からの決別を確定するのは、この瞬間からであり、いまや娘はそれらを非人間的なものと評する。

トーニが白人によって代表される人間性に加わった後で、彼女の仲間の黒人たちの非人間性は、耐え難い邪悪であることが明白になる。「あなたたちが私に加わることを強いる非人間的な行為は、私の最も内奥の感情をずっと以前から憤慨させてきたのよ。」とトーニは主張する。³⁸

さらにミュラー・ザルゲトから。

「君にいったいそんなことができるだろうか」という問いによって、彼はトーニを動揺させる（そして、初めて、囿としての自分の役割についてよくよく考えてみることになる、と推測して差し支えないだろう）。³⁹

しかし、感情の無い人間、殺人をなんとも思わないような人間など、果たして本当に存在するであろうか？ コンゴ・ホアンゴやバベカンですら、理由無く残忍なのではなく、復讐心という感情に衝き動かされているのである。いったい、トーニにその怨恨がどれほど共有されていたらう。また、彼女の立場において、大人たちの命令に逆らうことなど当然可能であるはずがない。殺戮に荒れ狂う聖ドミンゴ島の凄まじい日常は、どうにも逃れようのない現実でしかなかったはずだ。その逃れ得ない悲惨な日常に彼女が傷ついていなかったとか、うんざりしていなかったとかいう風に想定するのは、やはり、あまりにヨーロッパ中心的な見方ではないか。つまり、このような議論には、結局、ヨーロッパ的な「人間性」の理念を受け入れるまで、野蛮人には真に人間らしい感情などあるはずもないという偏見が透けて見えるのである。ある時点までのトーニの感情については、何も書かれていないからこそ、書かれていることを頼りに、可能性を色々に想像できる。そういう余地を残した書き方を、クライストは意識的に取っているのではないか。語り手が物語る三人称の小説という形式を取りつつ、内面はしばしば説明されるが、時には客観的な外面描写の背後に隠されてもおり、その焦点は選択的に動いている。

グスタフに出会う以前のトーニが厭世的な気分を満たされていたとか、厭々服従していたとか言いたいのではない。確かに、それほど意識的に、わが身の置かれた立場を嫌悪していたとは言いがたい。作中でバベカンが鋭く指摘しているように、彼女は、以前は何の文句も言わず、殺人に手を貸していたのである。だが、グスタフが現れ、別の可能性が開けてくる。グスタフと「愛の一夜」を過ごす以前においても、彼女はグスタフに関心を示し、彼のそばに座り、テーブルに肘をついて、頬杖しながら、彼が食事する様子をじっと見つめている。グスタフが彼女の腰に手を回したりする性愛的な仕草は初めからあるので、既にそこから誘惑のプロセスが始まっているとも言えるが、それにしても、次第にそれに反応していく彼女は、それ以前に殺された他の白人の男たちには感じなかったものを、グスタフに感じているのだろう。それは、彼女がはみ出し者であるのと同じように、彼もまたはみ出し者であることを、本能的に感じ取っているからではないだろうか。彼女の孤独が、彼の孤独に反応するのではないか。彼女が無意識に求めていたものを、グスタフが引き出すのではないか。トーニが、食事時のグスタフに対して発するわずかの問いも、彼女が不在の父親について、また、荒れ狂う現在の内乱の原因について、ひそかに思いを巡らし、答えを求めていることを示している。

グスタフもトーニも、二人が遭遇してしまえば反応せずにはおかない電気のようなものを帯びた人物と言える。グスタフは「嵐吹き荒れる夜の闇の中」に登場する。ここで「嵐吹き荒れる」は「stürmisch」であって、雷電を予感させるような「gewittrig」で

はないが、何事が起こりそうな不安と緊張に満ちた気配を表していることに変わりはない。嵐への言及は、少し後でもう一度繰り返され、光と闇が錯綜する光景が描かれる。

これらの言葉を語りながら、彼はほんのちよつとの間、窓辺に歩み寄り、嵐の雲と共に月や星の上を掠めすぎていく夜の闇を見やった。(SWB II 175,21-22)

帯電した二人の人物が出会い、放電せずにはおかない、そのような「相互作用 (Wechselwirkung)」⁴⁰ から帰結する悲劇をクライストは書こうとしたのであって、人種差別撤廃や奴隷制廃止のための政治的プロパガンダを書こうとしたわけではない。先に論じたように、そうしたものの矛盾点はもちろん克明に書き込まれているのであるが、それらをあげつらうためにクライストがこの作品を書いたのだとは到底思われぬ。政治的な意図を言うなら、むしろナポレオンの支配を標的としているはずであり、ナポレオンに支配されたドイツの隠喩として、聖ドミンゴ島が語られているはずである。(それは北方のドイツの隠喩として、南方のイタリアへと舞台を移し変えた『O侯爵夫人』の場合と同様であろう。) そこではみ出し者であったクライストは、グスタフと同じような死に方を自らのために選んだのだ。

人種やジェンダーに関わる側面が、この作品において極めて重要であることは言うまでもない。しかし、すべてをそれらに還元してしまうならば、なにかもっと重要なものが見えなくなってしまう、この短編の文学作品としての生命が薄れてしまいかねない。クライストも結局のところ時代の子であって、この作品には隅から隅まで人種偏見が染み付いているのだといった結論で片づけてしまつては、なんともこの作品が浮かばれない。ハンス・ペーター・ヘルマンは、「クライストは、いまや、ますますはっきりと、同時代人の人種差別主義をただ引用しているだけで、それを意識的に暴露し、それを見事に打ち破る風刺家としての姿を現した。それは80年代の『ポストモダン』の諸理論によって形成されたクライスト像にぴったり適合した。」⁴¹ とホルンの75年の論文以来の解釈の傾向を要約した上で、「しかしながら、90年代の初めには、ポストコロニアル理論の潮流の中で、二つの論文がこのコンセンサスに対して異を唱え、人種偏見がこのクライストの短編を貫いていると主張した。」⁴² と述べている。註によれば、二つの論文とはユルリングス(1991)とヴェルレン(1992)のことを指しているのであるが、これらの論文をそのように読むのは的外れのように思われる。ユルリングスの91年の論文は、確かにホルンの論文についての言及から始まり、ホルンの開始した議論を「一歩先へ進めた」アングレスを批判するものではあつても、逆にクライストが人種偏見に満ちていたことを立証しようなどとはしておらず、ただ、人種偏見の矛盾を突いて脱構築するとか、ヨーロッパ中心主義的なテキストを自壊させるなどということが作品の意図ではないことを明らかにしようとしているに過ぎない。結論において、ユルリングスは、「いずれにせよ、『聖ドミンゴ島での婚約』において、クライストは、自文化と異文化の間の解釈学的緊張や、アイデンティティと差違、馴染み深さと異質性の相関関係を、ヨ

ーロッパ中心主義的な思考パターンの相対化や問題化のために利用したわけではない。『ハイチに移し変えられたプロイセン』については、批判という文脈においてではなく、むしろ投影という文脈において語られるべきだろう。」⁴³と述べている。つまり、文化間の解釈学的緊張を無視しているわけでもなければ、プロイセンがハイチに投影されていることを否定しているわけでもない。

ヴェルレンの論においても、人種偏見について暴かれるのは、作者クライストについてではなく、グスタフと語り手についてである。

結局、トーニは人種とジェンダーに関するテキストの構築によって、二重に犠牲にされる。クライストはまた、暴力を反転させる。すなわち、黒人の属性とされる復讐への狂気じみた欲望は、グスタフによって、トーニの残忍な殺害において模倣される。ここでグスタフは、熱に浮かされたような不安の状態、彼の理性的自己を失わせる感覚の乱れの中にある者として描かれている。後で、彼は、死んだようになっているトーニをだらりと肩に抱えて、彼女の寝台へと運ぶ。この短編の冒頭で、語り手とグスタフは、革命が引き起こした暴力の信じがたいほどのでたらめさと偶然性を合理的に説明しようとしている。結局のところ、テキストは、白人の主人公の中での一見無意味な抑圧された暴力の突発によって、偶然性を根絶しようとするこの試みを無効にする。『婚約』においては、傭兵グスタフの行為は、彼自身のレトリックのみならず、白人の血統を特権化する人種言説の仮面をも剥ぐのである。⁴⁴ (傍点筆者)

しかし、ヘルマンの誤読は、非常に意味深長である。ヘルマンは、ヴェルレンとユルリングスの論の中に、結局、ある種の新たな西欧文明中心主義ともいうべき反動的傾向を感じ取ったのかもしれない。ヴェルレンが論文の最後に述べている「記念碑的な嘘」⁴⁵にしても、読み方しだいでは、クライストが結局白人支配に加担したかのように受け取られかねない。だが、問われるべきは、そのような物語の締めくり方自体の中に潜む批判的解釈の可能性ではないだろうか。ヘルマンは、ヴェルレンの言うところの「記念碑的な嘘」についてコメントした後で、論文を次のように結んでいる。

クライストのテキストは、多くの矛盾を抱えたこの結末がどのように解釈されるべきかについて未決定のままにしている。私はそれを作詩法上の観点から解釈する。人種に関する言説とジェンダーに関する言説を媒介として遂行された実験は、完了した。語り手は極めて真剣に述べられた歴史を語り終えた。いまや彼はそれを軽い皮肉を込めて詩的な遠方に押しやり、読者をその呪縛から解放する。

クライストのすべての短編小説（『拾い子』に至るまで）は、結末でのそのような一見融和的なものへの転回を知っている。その転回は、物語の真剣さを廃棄する

ものではない。しかし、それは、ストーリー（行動）の劇作家にして言語芸術家であるクライストが、登場人物たちと彼らの状況へのあらゆる関与において、彼がここでなしていること、すなわち、「語る」ことに対して非常に意識的であったということのを思い起こさせる。⁴⁶

すなわち、クライストは意識的に物語の結末をこのようにしているのであって、それが彼の語りのあり方に則しているという主張である。

しかし、いずれにせよ、テキストの解釈は、作者の意図の解読とは分けて考える必要があるだろう。テキストが我々の時代の読者に対して開示する意味の可能性こそが、問われるべきである。帯電した二人が出会い、それが起爆剤となって「脆弱な世界の仕組み」（SWB II 147,14）は破碎され、そのさまざまな層を曝け出すことになるが、それは最終的にはスイスの平穏で牧歌的な風景の中の「記念碑」に回収されてしまう。それは確かに一種の隠蔽であるが、そこに大いなる皮肉が込められていると読むことも可能である。結局、作者の意図がどうであったかというようなことに拘るよりも、独立した作品としてのテキストが提供する読みの可能性に立脚するべきであろう。

結

テキストは様々な層から織り成されているので、当然多様な面からアプローチが可能であり、その歴史的な組成を吟味考察することに対してはなんの異存もないのであるが、そちらに気を取られすぎて、作品の本質が見えなくなってしまっただけでは元も子もない。クライストに人種偏見があったかどうかという問いに決着をつけることで、この作品の悲劇的な死の意味が完全に明らかになるとは思えない。クライスト作品の魅力は、むしろそうした議論で汲み尽くせないもの、すなわち、政治的、イデオロギー的、哲学的要素——それらはすべて作品に含まれているけれども——に還元しつくせず謎めいたまま残っているものにこそ存している。矛盾のように感じられもするが、あながち矛盾でもないのではないかと、なにが筋が通った話なのではないかと、隔靴搔痒の思いながらも言い表せぬものが残るのである。結論として、このように曖昧なままでは情けないが、現時点では、筆者にはこれ以上のことを述べるができない。

ただ、今回の考察でわかったことは、一見したところ関連が見出しがたいクライストの諸作品の間に繋がりを見出そうとするなら、テキストのある側面だけを実証的に検討していても、おそらく答えは出てこないだろうということだ。つまり、ポストコロナル的な視点からこの作品を読んでも、それなりに結論は出るかもしれないが、ではクライストの作品全体との関わりはどうかという点になると、さっぱり見えてはこないのである。アングレスのように『ヘルマンの戦い』と比較して読むというような試みは、なかなか興味深くはあっても、そこから出てくる結論が、結局、クライストのナショナル

ズム、それも非常に危険な方向に通じているような民族至上主義ということになってしまうならば、それこそアイデンティティ・ポリティクスの最たるものということに落ち着いてしまう。しかし、それでは、クライストがしばしば異郷の世界——ホーフマンスタールの言葉を借りれば「異郷のラテン系民族の地 (fremdes romanisches Land)」⁴⁷——を舞台にした短編小説を書いた意味をどう把握したらよいのだろうか。たとえば、本論中で指摘したように、『O 侯爵夫人』も北イタリアを舞台としている。しかも、ロシアの伯爵と結婚して幸せになるのだから、『ヘルマンの戦い』から導き出されるような民族至上主義からすれば、O 侯爵夫人は自分の民族に対するとんでもない裏切り者ということになるだろう。ところで、筆者には、一応幸福な結末に終わるこの物語と『聖ドミンゴ島での婚約』との間に、なにか双子のような関係があるような気がしてならない。それはやはり、突然雷電のように降りかかる運命によって、内面に潜んでいた力を強化され、自律性を獲得していく女性についての物語であるという点で、両作品が非常によく似た相貌を示しているからである。

また、クライストの短編と『マリオネット劇場について』などのエッセーとの関わりについては、ゲルハルト・ノイマンのポストモダンので抽象的な手法に抛る方が、よほどよく見えてくるのではないかという印象をもった。ノイマンの論文は、非常に詩的な書き方ではあるが、作品の中に繰り返し現れる隠喩や概念を手掛かりとして、クライストの作品群が描く根本的な問題の輪郭を浮かび上がらせているように思われる。

しかし、今回は既に力尽きた。これらについて考察するのは今後の課題とし、今はここで筆を置くこととする。

註

クライストの原典からの引用箇所については Heinrich von Kleist, *Sämtliche Werke und Briefe*, Münchner Ausgabe, hrsg. von Roland Reuß und Peter Staengle, 3 Bände. (München 2010) から私訳して引用した。(本文中、この全集からの引用箇所については、SWB の略号に巻を現すローマ数字を添え、ページと行をアラビア数字で示した。) その他のドイツ語文献からの引用も、断りが無い限り筆者による私訳。

¹ Peter Horn: Hatte Kleist Rassenvorurteile? *Eine kritische Auseinandersetzung mit der Literatur zur Verlobung in St. Domingo*. In: Ders., *Heinrich von Kleists Erzählungen. Eine Einführung*, (Königstein 1978) S. 134-144.

² Ruth. K. Angress, Kleist's Treatment of Imperialism: Die Hermannsschlacht and ›Die Verlobung in St. Domingo. In: *Monatshefte*, vol. 69 (1977) S. 17-33.

³ Hans Jakob Werlen, Seduction and Betrayal: Race and Gender in Kleist's ›Die Verlobung in

St. Domingo, *Monatshefte*, vol. 84 (1992) S. 459–471.

⁴ Susanne Zantop, Changing Color: Kleist's ›Die Verlobung in St. Domingo‹ and the Discourses of Miscegenation. In: Bernd Fischer (Hrsg.), *A Companion to the Works of Heinrich von Kleist* (New York 2003) S. 191-204.

⁵ Hans Peter Herrmann: Die Verlobung in St. Domingo. In: Walter Hinderer (Hrsg.), *Interpretationen. Kleists Erzählungen* (Stuttgart 1998) S. 111-140.

⁶ 小田亮「同一性の政治学」綾部恒雄編『文化人類学最新述語 100』弘文堂、2002年、128–129頁参照。

⁷ Herbert Ürlings, Preussen in Haiti? Zur interkulturellen Begegnung in Kleists ›Verlobung in St. Domingo‹. In: Hans Joachim Kreutzer (Hrsg.), *Kleist-Jahrbuch 1991* (Stuttgart 1991) S. 185-201.

⁸ Horn, a.a.O., S. 135-138.

⁹ 「(…) クライストの思考は、独自の色合いをもっている。というのも、この基本的観念から発展してくるのは、そのような幸福を実現するための様々な条件と可能性を考量しつつ彼の世界像を一般に特徴づけている、二つの論争上の概念である。一方では、秩序の設定、展開、崩壊を演出するのは、実験のシークエンスとしての『例の検証』についての行動規則である。しかし、その一方で、一つの根源的欠陥——たぶん樂園における墮罪に由来する遺伝的欠陥——の疵を受けた始原についての人類的なモデルが存在している。1802年に産出が始まるクライストの文学テキストは、幸福の追求と疵のある始原という、これら二つの基本的観念を磨き上げ、芸術上の実験の結果として、論証的に確保しようとする試みである。」(Gerhard Neuman, *Das Stocken der Sprache und das Straucheln des Körpers: Umriss von Kleists kultureller Anthropologie*. In: Gerhard Neumann (Hrsg.), *Heinrich von Kleist: Kriegsfall – Rechtsfall – Sündenfall* [Freiburg im Breisgau 1994] S. 13.)

¹⁰ 『ロミオとジュリエット』との類似については、ハンス・ペーター・ヘルマンも指摘している。「クライストは彼の登場人物たちの恋愛を真剣に受けとめている。彼はこの子供のような男が愛に対して失敗すると同時にそれに合格する様を描いているのであるが、この愛は、人種の境界を横切る地点で生じるものとして設定されている。その矛盾に彼は耐えられない(女の方も耐えられないことが、示される。)まるで、ハイチのロミオとジュリエットだ。しかし、シェークスピアの作品よりも更に、クライストにおいては、憎みあう「家」同士の力が、関与する者の魂と言葉の中にずっと深く作用している。」(Hermann, a.a.O., S. 123.)

¹¹ Hermann, a.a.O., S.111.

¹² 筆者の知る限りでは、唯一ヘルベルト・ユルリングスのみがそれに踏み込んだ解釈を行っている(Ürlings, a.a.O., S. 199f.)。

¹³ 「Mestisa」という言葉は、この作品においては白人の血が4分の3、黒人の血が4分の1の混血児の意味で用いられていると思われる。この点については、ミュラー-ザ

ルゲトの註を参照されたし (Müller-Salget, a.a.O., S. 153)。

¹⁴ 肌の色のさまざまな色合いの交錯の意味については、上述のズザンネ・ツェントツプの論文で考察されている。「明らかに、黒、白、黄、赤は中心的な指標であり、それらが物語にまとまりを与え、登場人物の行動を衝き動かし、団結を生み出し、また引き裂く。差違を表す記号として、また人格、動機、立場を理解するための手がかりとして、これらの指標は、この植民地時代の物語の登場人物たちばかりではなく、読者をも導くのである。しかし、たいてい、それらは曖昧な記号であり、解釈を誘いながらもはねつけ、誤解を、極端な苦悩を、さらには死をすら引き起こす。そして、明らかに、様々な色合いは、強制的な結合の所産か自発的な結合の所産か、不自然な家族か自然な家族か、暴力か愛かといった、様々な愛情の度合いの指標である。換言すれば、それらが指し示しているのは、ヨーロッパ人とアフリカ奴隷の到来から 18 世紀末—19 世紀初頭の奴隷反乱および脱植民地化闘争に至る、カリブ海の島々における、人種間の関係の複雑な歴史である。」 (Zantop, a.a.O., S. 192.)

¹⁵ Carl von Linné, *Systema Naturae*, Ed. X. 2 voll. Holmiae (Stockholm, 1758-59).

¹⁶ イマヌエル・カント「様々な人種について」、『カント全集 3 前期批判論集Ⅲ』、岩波書店、2001 年、393—415 頁。

¹⁷ イマヌエル・カント「人種概念の規定」、『カント全集 14 歴史哲学論集』、岩波書店、2000 年、67—92 頁。

¹⁸ Johann Friedrich von Blumenbach, *De generis humani varietate nativa liber. Cvm figvris aeri incis* (Göttingen 1776). プルーメンバッハの分類では、茶を加えた 5 色に分けられている。

¹⁹ August Ludwig von Schlözer, *Weltgeschichte nach ihren Hauptteilen im Auszug und Zusammenhang* (Göttingen 1785).

²⁰ イマヌエル・カント『美と崇高との感情性に関する観察』(1764)の中のアフリカ黒人に関する記述は、ヒュームから受け継いだカントの人種偏見を示している (イマヌエル・カント「美と崇高との感情にかんする観察」、『カント全集 2 前批判期論集Ⅱ』、岩波書店、2000 年、379-380 頁)。

²¹ ホルンが列挙しているような人種偏見に満ちた過去のクライスト解釈 (Hom, a.a.O., S. 135-137) は、語り手の意見が作者の意見と同一であるという前提に立ってこそ、可能であったと思われる。

²² Ürlings, a.a.O., S. 187.

²³ Ürlings, a.a.O., S. 188.

²⁴ Werlen, a.a.O., S. 460.

²⁵ 「(…) 我々はこの語り手を不審に思うはずである。クライストの物語においては、価値判断や、意味を充填された形容詞は、通例、読者の態度を決定するためではなく、むしろ問題を指摘するために用いられている。第二に、クライストはしばしば、極めて重要な情報を従属節の中でほめかしてあり、読者はそれをようやく後になってから理解し始めるのであるが、そうした情報は、しばしば、主節の中の強い断言を修正し、時

には無効にしてしまう。『婚約』の冒頭部分は、詳しく見るとよく分かってくるのだが、これらの方法の顕著な例を提供してくれる。」(Angress, a.a.O., S. 21)、「トニーを誘惑し最終的には裏切るといふ物語は、優越的な父方の白人の血統(ヨーロッパ)と劣等な母方の黒人の血統(アフリカ)を対照させる人種の言説を、繰り返すと同時に転覆する。同時に、クライストのテキストは、普遍的なものとしてされる平等についての啓蒙主義の教義が抱えもつアポリオ的な性質を、それが白人的規範から逸脱する人々の排除に依拠していることを明示することによって、さらけ出している。」(Werlen, a.a.O., S. 459-460)、「クライストが冒頭ではいまだ語り手に確証させている、一見明白な黒人と白人の対立は、しかしながらその後、『メスティーサ』という本質的に曖昧なトニーの存在、黒人の『復讐熱』に対する説明、恐るべき人物とされるコンゴ・ホアongoの『人間化』、白人主人公の失敗などによって、体系的に破壊される。」(Müller-Salget, a.a.O., S. 158)。

²⁶ Anke Bnnholdt-Thomsen, Kleists Standort zwischen Aufklärung und Romantik: Ein Beitrag zur Quellenforschung. In: Marie Haller-Neumann und Dieter Rehwinkel (Hrsg.): *Kleist: ein moderner Aufklärer?* (Göttingen 2005) S. 13-40.

²⁷ 1804年6月24日付のウルリーケへの手紙で、クライスト自身が自らの精神状態について使った表現(SWB II 819,32)。

²⁸ Bennholdt-Thomsen, a.a.O., S. 19f.

²⁹ Hermann, a.a.O., S. 118-122.

³⁰ テキスト中にグスタフの両親についての言及は無く、親族については伯父とその家族のことしか言及されない。グスタフはおそらく、クライストのように親の無い身であると思われる。

³¹ 「『聖ドミンゴ島の婚約』は、恋愛物語である。ハイチにおける人種問題は、その主題ではなく、クライストがその中で彼の不幸な恋人たちを行動させる状況にそなわった特徴である。」(Hermann, a.a.O., S. 129.)

³² グスタフの誘惑の中に我が身の安全を確保しようとする戦略的な動機が隠れているという見方は、たとえば、ヴェルレン(「グスタフの修辭的な戦略は、大部分、極端な状況の中で若い娘の援助を確保すること、彼を取り囲む敵対勢力に対抗するために従順な盟友を勝ち得ることに向けられているように思われる。」[Werlen, a.a.O., S. 464])やツァントップ(「まず、彼自身の動機に関して、明白さが欠けている。彼は、黒い巻き毛と黒い瞳をもつ明るい肌の色の美女に性的に惹きつけられ、圧倒されてしまうのか、それとも、この性的籠絡は、彼女を味方につけることで身の安全を確かなものにしようとする最後の、絶望的な試みなのか(…) ?」[Zantop, a.a.O., S. 202])に見られる。

³³ 「インクルとヤリコ」のモチーフについては、松村朋彦『越境と内省 近代ドイツ文学の異文化像』鳥影社、2009年の第6章「インクルとヤリコの子供たち」に詳しく紹介されている。

³⁴ Ürlings, a.a.O., S. 194.

³⁵ 信頼性の問題については、ユルリングスやツァントップが肌の色に関連させて、興

味深い考察を行っている (Ürlings, a.a.O., S.198-199 ; Zantop, a.a.O., S. 195-200) 。

³⁶ クライストの時代よりも更に 100 年下って制作されたアメリカ映画『国民の創生』(D. W. グリフィス監督、1915) を見ると、黒人と白人の間に生まれた混血の人物の曖昧であると同時に、結局は白人を裏切る信用できない存在という位置づけが、明瞭に読み取れる。アメリカの研究者が、『聖ドミンゴ島での婚約』の中で綾なす色彩のグラデーションに敏感に反応するのも、そのような隠喩がアメリカでは長く存続したからではないだろうか。

³⁷ Hom, a.a.O., S. 140f.

³⁸ Werlen, a.a.O., S. 465.

³⁹ Müller-Salget, a.a.O., S. 154.

⁴⁰ SWB II 286,24.

⁴¹ Hermann, a.a.O., S. 114

⁴² Hermann, a.a.O., S. 115

⁴³ Ürlings, a.a.O., S. 200f.

⁴⁴ Werlen, a.a.O., S. 469.

⁴⁵ Werlen, ebd.

⁴⁶ Hermann, a.a.O., S. 137.

⁴⁷ Hugo von Hofmannsthal, „Deutsche Erzähler“. In: *Gesammelte Werke in Einzelausgaben*, herausgegeben von Herbert Steiner, Prosa III, Frankfurt a. M. 1964, S. 108.